

再発見! 菟原住吉、昔を未来へ  
住吉歴史資料館

第11号

# 住吉歴史資料館だより



住吉のまちかど

秋の日の出前  
白鶴美術館より  
奈良の二上山を望む  
平成27年10月6日午前6時27分

建設にあたっては旧社務所のイメージ、中でも、旧国鉄の蒸気機関車を通してようになって煙や火の粉を避けるため屋根が鉄板で葺きかえられた葦葺き屋根の部分に象徴的に残るような設計としております。

本住吉神社宮司家には第二次世界大戦の空襲の戦禍を奇跡的に免れた

本住吉神社宮司家には第二次世界大戦の空襲の戦禍を奇跡的に免れた

本住吉神社宮司家には第二次世界大戦の空襲の戦禍を奇跡的に免れた

## ごあいさつ

### 資料館だより 第11号目次

ごあいさつ  
一般財団法人住吉学園理事長  
竹田統  
.....1ページ

住吉のまちかど  
秋の日の出前 白鶴美術館より  
奈良の二上山を望む  
.....1ページ

日本一の富豪村  
住吉村(1)  
住吉歴史資料館事業推進委員  
前田康三.....2~6ページ

住吉村誌を読む  
住吉最古のたてもの?  
野望堂の地蔵尊  
神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター研究員・住吉歴史資料館専門員  
木村修二.....7・8ページ

東求女塚古墳と  
菟原処女伝承(4)  
近大姫路大学人文学・人権教育研究所准教授  
住吉歴史資料館専門委員  
松下正和.....9~12ページ

一般財団法人住吉学園理事長  
竹田統

住吉村関係の神社文書、村方文書が残されており、住吉歴史資料館はこれらの文書の整理公開と、併せて住吉村に関する歴史資料を収集し、わかり易い形で住吉町民の皆さまにご覧頂き、ふるさと住吉への愛着を育んで頂くことを目的に事業を行っております。

昭和九年(1934年)住吉の裏山である渦森山から出土した渦森銅鐸を復元鑄造し、奈良文化財研究所の講演会を行ったり、昔からの町民の方々への聞き取り調査もその一つです。

また、近年は、神戸市立住吉中学校、同住吉小学校、並びに同渦が森小学校と連携して防災の心構えを子供たちと学んでおります。また、住吉中学校文化祭に出展もしております。

住吉学園では、町民の皆さまの「ふるさと住吉」を身近に感じて頂けるように、住吉歴史資料館の事業をバックアップしております。

どうぞ、お気軽に資料館をお訪ねの上、住吉の歴史に触れて頂くようご案内致します。

鏡番号	梅原末治「武庫郡住吉町貞田の求女塚」(『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第二輯』兵庫、1925年)	渡部多仲「菟原/処女塚」(『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告 第四輯』兵庫、1927年)	『住吉村誌』(1946年)	『祖先のあしあと川』(のじぎく文庫、1960年)	村上松韻『瀧の四季』(わた吉、1984年)	種本誠一『兵庫県の出土古鏡』(学生社、2002年)	『西求女塚古墳と青銅鏡』(神戸市教育委員会、2005年)	東京国立博物館ホームページ「画像検索」	所蔵
①	(四) 三角縁華紋帯四神四獣鏡 (第十六図版の(一))			三角縁神獣鏡		三角縁唐草文帯四神四獣鏡 (S17-33 (3号鏡)・図版14)	三角縁天王日月・唐草文帯四神四獣鏡 (28頁写真)	三角縁・天王日月・唐草文帯四神四獣鏡 (鏡背面列品番号J-6775)	東京国立博物館
②	(五) 三角縁帯神獣鏡 (第十六図版の(二))		梅原報告の転載	獸文帯三神三獣鏡		天王日月三角縁獸文帯二神一虫三獣鏡 (S17-32 (2号鏡)・図版13)	三角縁天・王・日・月・獸文帯二神三獣一虫鏡 (30頁写真)	三角縁三神三獣一虫鏡 (鏡面列品番号J-6776)	東京国立博物館
③	(六) 三角縁三神三獣鏡 (第十七図版の(一))	三角縁三神三獣鏡 (図版第六の(二))	(四)は1059頁の写真 (五)は1060頁の写真 (六)は1062頁の写真	獸文帯三神三獣鏡		天王日月三角縁獸文帯三神三獣鏡 (S17-31 (1号鏡)・図版13)	三角縁天・王・日・月・獸文帯三神三獣鏡 (29頁写真)	三角縁三神三獣鏡 (鏡背面列品番号J-6777)	東京国立博物館
④	(一) 長宜子孫内行花文鏡 (第十五図版の上)			内行花文鏡		内行九花文鏡 (S17-36 (6号鏡)・図版14)			不明
⑤	(二) 絵模様帯神獣鏡 (第十五図版の下)			半円方格帯神獣鏡		画文帯神獣鏡 (S17-35 (5号鏡)・図版14)			不明
⑥	(三) 三角縁獸帯四神四獣鏡 (図版なし)			獸文帯四神四獣鏡		三角縁獸文帯四神四獣鏡 (S17-34 (4号鏡))			不明
⑦					(176頁写真上)	内行六花文鏡 (S17-37 (7号鏡)・図版15)	内行花文鏡 (31頁写真左)		個人
⑧					(176頁写真左下)	不明鏡 (S17-38 (8号鏡)・図版15)	鏡式不明鏡 (31頁右上)		個人
⑨					(176頁写真右下)	不明鏡 (S17-39 (9号鏡)・図版15)	鏡式不明鏡 (31頁右下)		個人
⑩					(176頁写真中)	不明鏡 (S17-40 (10号鏡)・図版)	鏡式不明鏡 (31頁中下)		個人

【表1】東求女塚古墳からの出土鏡図版一覧

## 住吉歴史資料館ご案内

再発見! 菟原住吉、昔を未来へ

開館の目的は、「住吉に住む人々が郷土を理解し、それを子供達に伝え、子供達も郷土に誇りを持ち、ずっと住み続けたいと思うような町にしたい。住吉歴史資料館は文化・歴史的の面からそれをお手伝いする。」ことです。

お願い 広くみなさまからの情報、資料のご提供をお願い致します。

- 各町協議会の古い記録類、書類。旧青年団、警防団の旗など。
- 各お家に伝わる古い書類、絵図、古文書 など。
- 各お家に残っている、農耕具、或いは、馬や牛が牽引する荷車(いわゆる「馬力」)の道具類などの労働具。
- 古い写真(近所、町内、住吉村、武庫郡、神戸 など)、学校の卒業アルバム、卒業証書。
- 災害時の記録や写真。(阪神大水害、阪神大震災、昭和42年水害 など)
- 戦時中ののぼり、腕章、たすき、或いはバッジ、記念品など。
- だんじり、住吉祭の写真。(渡御、宮入、宮出し など)

### 編集後記

本年度より住吉歴史資料館では神戸市立住吉中学校のトライやるウィークを受け入れました。活発な中学生と地元のことを勉強しました。若い人の元気というか、エネルギーを感じました。そんなわけで、資料館だより11号の編集が若干遅れました。

さて、11号ですが、住吉学園竹田理事長さんにはご挨拶文を頂き巻頭を飾ることができました。住吉学園の後援あってこそこの資料館事業です。専門委員松下先生の「東求女塚古墳と菟原処女伝承」は4回目です。実は8月に地元の旧家に同古墳から出土した銅鏡の破片とともに資料が保存されていることがわかり調査させていただきました。従い、新しい発見についても第5回として書いて頂きます。また、専門委員木村先生には、住吉中学校横の「のみ堂」のお地藏さんについて書いて頂きました。お堂は住吉で最古のたてものである可能性が強くなっています。事業推進委員の前田さんには日本一富豪村といわれた住吉村の住宅地形成の背景や、実際の大邸宅の建設について具体的にまとめてもらいました。大邸宅の写真も載せています。2回連続となります。この「まとめ」は、阪神間モダニズムや住吉学園の創立についての事項を調べる際のデータベースとして今後重宝することになると思います。(M.U.記)

- 資料館の作業日は毎週木曜日の午前中です。また、別途、日曜日は展示室を開館しています。(世話人会の委員の方がお世話)
- 資料館の座敷ではお茶会が「菟原茶華道会」主宰で開催されます。平成28年は、1月17日、3月13日、5月8日、7月10日、9月11日、11月13日の各日曜日です。



# 日本一の富豪村 住吉村(1)

住吉歴史資料館事業推進委員 前田 康三

わたしたちのふるさと、神戸市東灘区住吉が兵庫県武庫郡住吉村と呼ばれていた明治末1900年ころから大正をへて、昭和二十五年(1950年)の神戸市合併ころまで、住吉は「日本一の富豪村」とよばれていました。

なぜそう呼ばれるようになったのか。住吉村当局の住宅政策、並びにそれに基づいて実際に邸宅街がどのように形成されていたのかにつきまともてみました。2回のシリーズで「資料館だより」に掲載していきます。今回は第1回です。

尚、まとめるにあたり以下の論文を参考にさせて頂きました。特に、富豪たち、即ち、新来の住民である大阪の大資本家が豪邸を構えるにいたる時期と規模、その場所については、精力的に調査されており助かりました。住宅の大きさについては、下記論文②の『超大邸宅』Ⅱ敷地四千坪以上、『大邸宅』Ⅱ同千〜三千坪として表記しました。

- ①『旧住吉村の住宅地開発とその特徴』住宅総合研究財団研究論文集 No.31, 2004年版 主査山本ゆかり(京都市立大学大学院理工学研究科博士後期課程)
- ②『旧住吉村の住宅地開発とその特徴』住宅総合研究財団研究論文集 No.31, 2004年版 主査山本ゆかり(京都市立大学大学院理工学研究科博士後期課程)

程委員萬谷治子(同修士課程)委員加藤拓郎(住友信託銀行株式会社) 社 当時同修士課程

②『阪神間の住宅地形成に関する基礎的研究(2)』第4章住吉・御影山手住宅地』住宅総合研究財団研究年報No.21 1994

主査坂本勝比古(神戸芸術工科大学教授)委員鈴木成文(神戸芸術工科大学教授)委員日色真帆(神戸芸術工科大学助手)

### 大邸宅街形成の理由と住吉村の村勢

住吉は全国屈指の良好な住宅地として発展してきました。この理由は色々挙げられますが、まず、第一には、温暖な気候の健康地であることです。六甲南面の傾斜地の日あたりの良さ、山海の景観、また、豊かな「ものなり」は住吉の特徴で、歴史的にも縄文時代から人が住んでいました。

第二には、官営鉄道の住吉駅の設置があります。明治七年(1874年)六月に開設されたこの駅は、高級住宅地としての住吉の発展に決定的な道筋をつけました。

第三には、住吉駅誘致を含め村当局の先見の明があったことが挙げられます。

明治八年(1875年)当時の住吉村は、人口二千二百人、農業は三分の一に過ぎず、他は住吉特産の御影石の切り出し、加工、灘五郷酒造関係の水車精米の稼ぎ人、それに住吉呉田港での海運関係の沖仲仕、それに西国街道「間宿住吉」の商業関係者などでした。いくら、住吉が将来、良質な住宅地となるといわれても、そのための住宅政策を確立し、住宅誘致策、水道などのインフラの整備促進策を実行するのに躊躇がなかったとは言えませんが、維新の動乱をかくくぐった住吉村の「おとな達」は、住吉村の近代への発展を期して果敢に「将来」へ挑戦したのです。

村当局の先見の明にはもう一つあります。大邸宅地が形成されつつあるなかで、それら住宅の主は、当時の日本の政治経済社会をリードする新興の大資本家たちでした。村当局は、それらの一流の人々と連携をとり政策を進めて行ったことでしょう。彼らから村当局への忠告、指導もあつたはずで、特に、平生三郎氏の存在は大きいです。実業界において東京海上、川崎造船などの経営に取り組み、教育面では甲南学園を創始し、国政では、民間人

ながら文部大臣、枢密顧問官を歴任し、更に加えてラジアルでの移民事業にも貢献した平生三郎氏は大正十四年(1925年)から昭和四年(1929年)の間住吉村議会議員として、村当局の「おとな」たちにも大きな影響を与えました。神戸市との合併問題、昭和十三年(1938年)の「阪神大水害」の復興にあたっては、平生氏の正面から取り組む思考法、助言が村当局に生かされています。

住吉村の新住民として、当時の日本をリードした大資本家経済人の考え方、生活様式が住吉村のもつ独特の雰囲気と気品につながり、それがまた幾多の資本家たちを魅了し、住吉に邸宅を構えようという好循環になったと思われまふ。

大邸宅街形成がほぼ完成しつつあつた昭和十年(1935年)の村勢を『住吉村誌』所載の、『兵庫県産業風土記』で見てもみましょう。

人口一万五千人で戸数別の割合は商業35%、工業22%、農業はわずか2%でした。村内はすでに宅地化していたことが窺えます。工業は清酒業、水車動力による製粉業(いわゆるセルロシ

水飴)がセルロシンと並び住吉村の特産品として計上されています。どんな味だったのでしょうか。いずれにしても工業生産額としては少なく、住吉村は既に大邸宅が並ぶ村であつたといえます。

これら大邸宅への女中、男衆の奉公、そして大邸宅専属の庭師、植木師、特産の大御影石の堀の石積みなど特殊技術の職人さんたちもおり、サービス業も村民の生計の柱となつていたと思われまふ。

### 官営鉄道住吉駅の設置

住吉村の近代化は鉄道敷設ではじまりました。阪神間の官営鉄道の「住吉停車場」の誘致です。

住吉村当局は、近代社会の原動力である鉄道の重要性を理解し、住吉村を通過する鉄道ルートと駅の設置の話に対して、なんと村内の中心地へと誘致しました。

当時、汽車の煙で水が濁る、魚が逃げるといわれた時代です。阪神間の海岸沿いを通す予定の線路は大反対を受け内陸部を通ることになり、住吉停車場を除く停車場はいずれも村はずれに置かれました。

住吉村内の鉄道ルート予定地の村民には、当然、立ち退きを強いることになりました。そこには村当局の説得と村民の理解があり、その上での鉄道開通だったのです。



写真① 村山邸



写真① 村山邸洋館



写真② 久原邸ロシア館昭和初期(阪神間モダニズム)

### 明治から大正初期にかけての第一期邸宅街の形成

明治七年(1874年)七月、住吉駅の開業後、明治三十年ころから兵庫県武庫郡住吉村が住宅地として現れてきます。

明治三十三年(1900年)に、朝日新聞創業者の村山龍平氏が私宅を住吉村の西となり、当時の兵庫県武庫郡御影町那家に『超大邸宅』を構えます。龍平翁は、当時、新興の資本家仲間の寄り合いで「翁は、なんでも、広い山を買われたようすなあ」とからかわれ

たということでした。その敷地は、現在『香雪美術館』が置かれ、緑豊かな太古の森が残っています。(写真①)

同じ年、住吉村牛神前に河内研太郎氏が土地を取得しました。彼は海運事業を営み、後に、甲南学園創立に参画します。

明治三十七年(1904年)には、住友銀行の初代支配人だった田辺貞吉氏が住吉村反高林に私邸『超大邸宅』を構えます。尚、田辺氏は退職金を活用し、設計は住友家お抱えの建築家野口孫市氏が担当しました。(写真②)

同年、久原財閥総帥で日立グループ創設者の久原房之助氏が住吉村の東となり、住吉川を越えたところの兵庫県武庫郡本山村野寄に『超大邸宅』を構えます。これは敷地が三万坪をこえ、現在の山手幹線からJRの線路際ま



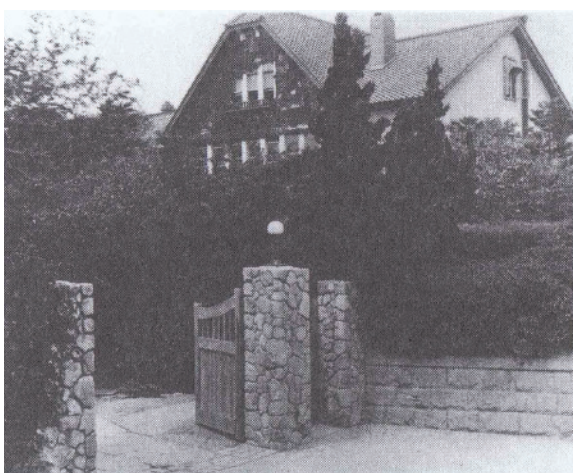
写真③ 田辺貞吉邸(『阪神間モダニズム』)

で、住吉川沿いの土地すべてでした。六甲山系から水を引き、庭内に池を配して六甲山より冷風を引き込んだ風洞、和洋の建物、茶室、宴会場、クジャク・フラミンゴを飼った鉄骨の大鳥籠など緑の木立に囲まれた贅を凝らした豪邸でした。(写真②)



明治三十八年～四十年(1905年～1907年)、住吉村は、日本住宅(株)社長の阿部元太郎氏及び田辺貞吉氏との間に住吉村観音林・反高林一帯の土地を坪七厘で二十年賃貸する契約を締結しました。彼らは一万坪あまりの住吉川土手沿いの松林の荒地を上水道の完備した宅地に開発する事業に乗り出したのです。実際の開発事業は明治四十二年頃(1909年頃)から始まったと言われます。

反高林の分譲地には東洋紡績社長の阿部房次郎が土地を取得しています。これを契機に、大商工都大阪と大港都神戸の中間という絶好地に位置し、住吉駅を持つ住吉村は、大阪の大資産家、中でも大企業資本家社長クラスの富豪が多く居を構えるに至るのです。



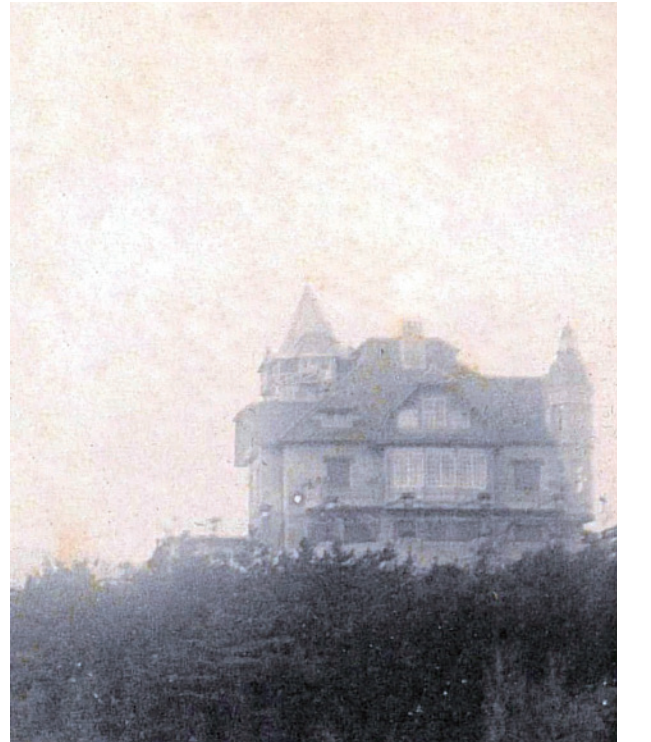
写真③ 平生鈞三郎邸(『マンガ平生鈞三郎』)

明治三十九年(1906年)には、大阪商人の生島永太郎氏が住吉村古寺に私邸を構えます。

同年、日本生命保険の取締役岸田空氏が住吉村牛神に私邸を構えます。



写真③ 今も残る平生邸正門(現・平生記念館) 平成27年11月5日



写真④ ヘルマン邸(『みかげの里』)

甲南学園理事長となる平生鈞三郎氏が住吉村新堂に私邸を構えます。(写真③)

同年、本山村野寄の丘にドイツ人のヘルマン氏が『超大邸宅』私邸を造ります。いわゆるヘルマン屋敷でセツシヨンスタイルの西洋館でした。彼は帝国海軍のシーメンス事件に連座して失脚します。尚、邸宅跡は現在ヘルマンハイツの名称で多数の住宅が建ちます。(写真④)



写真⑨ 野口孫市邸(『阪神間モダニズム』)



写真④ ヘルマン邸あと 1967年4月初旬 ヘルマンハイツ造成によるとりこわし直前



写真⑩ 田代重右衛門邸『阪神間モダニズム』

て、布教への協力を厭いませんでした。(写真⑩)

同年、阿部元太郎氏も住吉村牛神に私邸を構えます。

明治四十三年(1910年)には、各地の電気会社や鉄道会社の経営に参画した電気王・才賀藤吉氏が住吉村に私邸を構えます。

大正元年(1912年)には、大日本紡績社長小寺源吾氏が住吉村牛神に和風の『大邸宅』私邸を構えます。

**善美を尽くした大邸宅と大阪への通勤**

明治中期から大正にかけての状況、即ち、住吉村の大邸宅街が出来る初期の様子をみてきました。

大阪から屋敷を住吉に移した大阪の大資本家たちは、通勤といえ、住吉駅から汽車で大阪へ往復したのです。(写真⑤) 本山村野寄の久原房之助氏などは乗車する住吉駅への便宜のため、住吉川に「久原橋」を架橋し、駅までの約1キロを馬車で通ったといえます。久原橋のおかげで村民も便利になりました。久原橋は今も活躍しています。

大正十年(1921年)にできた『武庫郡誌』によると、鉄道院後に鉄道省運輸省)の調査では、日本全国の各駅中、住吉駅の一・二等切符の売上は全

国二位であったということです。一位は東京の大森駅でしたが、住吉駅の切符販売の特徴は、普段の通勤を行うための切符販売であつて、別荘客が別荘地往復のために購入したものではないことでした。

住吉村に大阪の大資本家たちが土地を購入したのは自らの居住のためであり、住吉村の住環境が如何に優れたものであるかを物語っています。

『武庫郡誌』の表現を借りると、こうなります。「反高林、観音林付近の住宅の善美を尽くしていることは恐らく全国首位であろう。そして、東京付近の別荘地である大森鎌倉付近の建築は住吉村の建築に比較したら、なんともまあ貧弱な感じがするが、その理由は、大阪は天下の経済の中心地であり、その郊外居住地である住吉村は、純然とした別荘でなく生活の本拠地なのであり、海、山、四季を楽しむ別荘的なおもむきをも加えた家族と住む本邸としての住宅であるからこそである。」

**甲南学園の創立―阪神間で最初の私立学校**

さて、邸宅街が形成されつつある明治四十三年(1910年)、住吉村周辺の新来の富豪住民から幼稚園及び小学校を設立して児童通学の便を計りたいとの声があがりました。

発起人のうち創立活動に携わったのは、田辺貞吉・才賀藤吉・弘世助太郎・



写真⑤ 住吉駅 大正13年 (交通科学博物館所蔵)

平生鈞三郎・生島永太郎・岸田空・阿部元太郎・野口孫市・山口善三郎など住吉村に早い時期に移住していた十一名の人々でした。

明治四十四年(1911年)、住吉村村会の議決を経て、住吉村は村有地の反高林三千九百坪あまりを無償で提供し、一方で発起人たちは寄付金を募り、阿部元太郎の監督のもと、建築家・野口孫市の設計で私立甲南幼稚園が竣工しました。

明治四十五年(1912年)には財団法人甲南学園の設立が認可され甲南小学校が開校しました。これは阪神間で最初の私立学校です。



## 観音林倶楽部の創立

明治四十五年(1912年)には大資本家で大阪経済界の有力者たちがこの地に住み、生活するに当たって社交倶楽部の必要性が言われ、発起人、阿部元太郎・田辺貞吉・野村元五郎・芝川栄助・静藤次郎によつて「観音林倶楽部」が設立されました。これについても住吉村は観音林の土地を無償で提供し、建物は野口孫市が設計し完成させました。

会員は多い時で九十名を数え、事業として座談会・講演会のほか、囲碁・謡曲・ビリヤード・生け花等の娯楽の集まりや講習がなされました。

これらの活動は地域の新来の住民である大資本家富豪たちのコミュニティの形成に少なからず役立っていたと言えます。(写真⑥)

観音林倶楽部の跡地は、現在、一般財団法人住吉学園となっており住吉学園

は東灘区住吉(旧住吉村の範囲)を中心に地域の教育文化事業に多大の支出を行っております。

## 住宅地としての将来構想―『住吉村振興論』の答申 (写真⑦)

住吉村は良好な住宅地として将来どうあるべきか、大商工業都市大阪と大国際港神戸の中間の立地を如何に活用すべきか構想を練っています。それは神戸市との合併問題とも密接に関係していったのです。昭和二年(1927年)七月に、既に天下の富豪村として地位を確立しつつあった住吉村に神戸市との合併問題が起こりました。

時の村長・植田直一氏は合併に関する臨時調査委員会を設置し、臨時調査委員に橋本重幸・那須善治・平生鈞三郎・下田清次郎・米谷庄七・木下久太郎・横田政次郎・中納安太郎・山本吉十郎 以上九名を委員に委嘱し調査・研究を行わせました。

同時期の大正十四年(1925年)に大阪府東成郡天王寺村が大阪市に編入されたことにかんがみ、平生鈞三郎委員の紹介で最後の天王寺村村長



写真⑥ 観音林倶楽部建物 後、住吉学園が本館として使用

現在、高級住宅地として天下に名高い

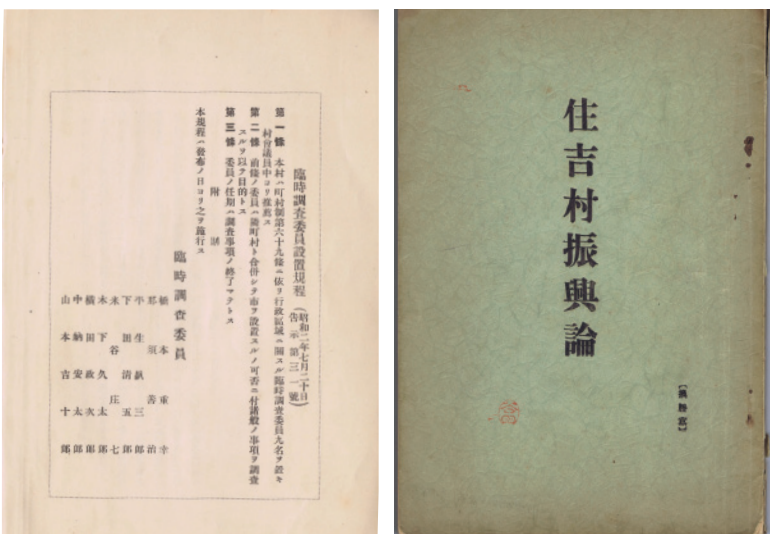
の武岡充忠氏を招き、天王寺村の大阪市編入の経緯、その長所・短所、並びに武岡氏の所感をまとめることにしたのです。

昭和四年(1929年)一月に至り、武岡氏は住吉村に必要な施設、即ち教育・上下水道・病院・焼却場等の建設にも言及する100ページをこえる『住吉村振興論』を著し住吉村に答申しました。

結論は、住吉村は全国に模範となるような理想の自治発祥の地となるよう人心の和を謀り努力してほしい、住吉村の力をもつてすれば可能である、というものでした。つまり、短絡的に大都市と合併してはならない、よく考えてほしいというものでした。

これで、第1回を終わりますが、ここで住吉のとなりの高級住宅地芦屋についても触れておく必要があると思います。

大正二年(1913年)に官営鉄道・大阪神戸間に芦屋駅が誕生します。住吉駅に遅れること三十九年でした。これを契機に芦屋市域、当時の兵庫県武庫郡精道村が発展を始めます。そして現在、高級住宅地として天下に名高い



写真⑦ 住吉村振興論 平生鈞三郎、横田政次郎の名が見える。横田は平生の考え方に強い影響を受けており昭和13年阪神大水害時の村長として復興を進めた。

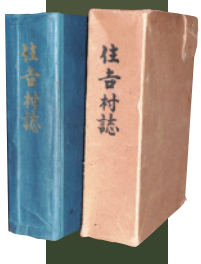
芦屋ですが、見て来たとおり、芦屋駅が出来た当時、住吉は既に芦屋のほるか上をいく高級住宅地として存在していたのです。

第2回目は、大正末から昭和十四年(1939年)くらいまでの住吉村の住宅インフラの整備事業、旧来の住吉村民と大資本家との交流、そして、大邸宅建設ラッシュにつきお伝えしていきます。

## 『住吉村誌』を読む

## 住吉最古のたてもの？ 野望堂の地蔵尊

神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター研究員・住吉歴史資料館専門委員 木村 修二



住吉中学校の西どなりにある小林墓地の北のはずれに古びたお堂があります(図1)。これは、現在「ハカマチのお地藏さん」と呼ばれています。かつては、「野望堂(のみどつ)」と呼ばれていました。このお堂の中には、大小三体の石仏が安置されています。

『住吉村誌』の九六八〜九ページに、この野望堂について書かれた記事があるのですが、その箇所を掲げましょう(よみがなをほどこし、旧字体や旧かなづかいを現代の体裁に直しました)。

記してある。又元禄五年の社寺帳には単に阿弥陀堂とある。以て古くからあった事がわかるが、以前は藁葺で阿弥陀如来の石像を安置し村内小前より順番に火灯したという。尤も現在の建物は其の後改築されたものである。

の「のみどつ」と書きますが、村誌の記述の後半に明治初年には「野々阿弥陀堂」と呼ばれていたとありますが、「野々」は、神仏や太陽・月など敬うべきものを指す幼児語に由来するという説があり、地名にしばしば使われます。阿弥陀堂のことを単に「御堂」と呼ぶことも多かったので、「野々」の「御堂」で、「のみどつ」と呼んだものが、いつのころからか「野望堂」という漢字を当てたものと思われる。



図1 現在の野望堂

野望堂の地蔵尊 以前は、字堂の本の櫨林中にあり、本尊は阿弥陀仏で明治十六年頃の記録によれば東西八間、南北拾吉間面積百九拾六坪の官地で阿弥陀如来が安置してあった。其地が開けるままに小林の墓地の北方に移されたものである。吉間半四方位の御堂で、此本尊の脇に西向の石地藏がある。此が通称「のみどつ」の地蔵さんと言われるものである。尚堂の傍に沢山な地蔵尊が安置されているが、此は以前本堂の本にあった時其周囲に祭られていたものであるという。尚此野望堂から少し南に当り、墓地の北の入口に六地藏と並んで向って右に西向の地藏の小さな祠が立っているが詳細は不明である。明治初年の報告書には野々阿弥陀堂と

みられますように、野望堂はもとは「堂の本」と呼ばれた地にあり、いつのころか現在地に移されたそうです。堂の本は小林墓地の西側の一帯につけられた小字(土地の小区画のなまえ)です。天明年間(一七八一〜九)に描かれたと思われる住吉村の絵図(神戸大学所蔵)をみると、後の小林墓地と呼ばれる墓所のすこし左手(西側)に小さな高床の建物が描かれています。このあたりこそ字「堂の本」に当り、恐らくこの建物が野望堂の江戸時代の姿ではないかと思われる(図2)。

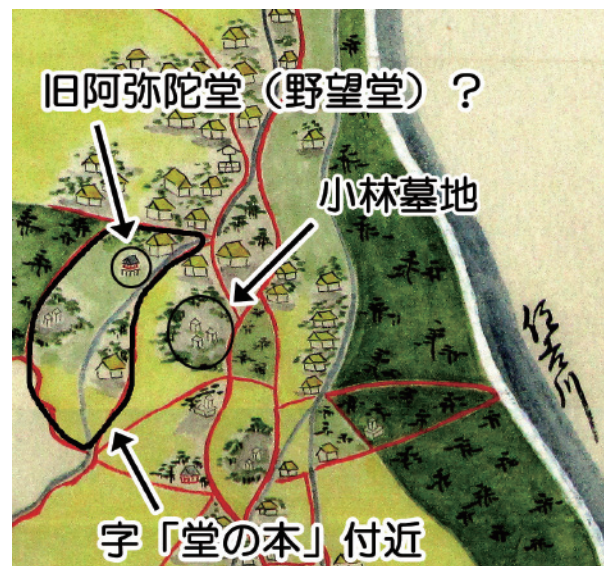


図2 住吉村絵図(天明年間)部分





図3 阿弥陀如来石像

野望堂に安置されている石仏ですが、まず中央には後光を薄く刻んだ向背(輪のような線)を持つ立像です(図3)。これが地蔵のように思われていますが、地蔵にしては頭に螺髪(らうはつ)が小さく、サザエを並べたような仏像の頭髪表現が刻まれ、親指と人さし指の先を付けて右手を上、左手を下に向ける印相を示しています。実はこの印相は、阿弥陀如来の来迎印(らいおういん)として典型的な「下品上生」という形を示していますので、この石像は阿弥陀如来像にほかな

りません。台座には寄進者の名前が刻まれた御影石を用いています。現在御堂の外に梵字が刻まれた碑が建っていますが、恐らく野望堂が旧地にあった時からのものと思われる。ここには、阿弥陀如来を指す種子(きりく)と「南無阿弥陀仏」の梵字が刻まれています。もともと阿弥陀堂だった野望堂の本尊がこの阿弥陀如来石像であることに疑いはありません。しかし、『住吉村誌』では野望堂の地藏尊として紹介されています。地藏石仏



図4 地藏菩薩石像(野望堂の地藏尊)

は、阿弥陀如来石像の両端に一体つつありますが、村誌で「のみどりの地藏さん」と言っているのは、阿弥陀如来像の右手のものではないかと思われる(図4)。建立年月日や寄進者などの文字が刻まれているかは、精密な調査を行う必要がありますが、風化が進んでおり判読は難しくそうです。

これらの石仏を安置する野望堂の建物について、前述のように江戸時代には高床式の堂だったと思われる(図5)。村誌によれば藁葺きの屋根だったとあり、かつてのお堂の様子が偲べれますが、「現在の建物は其の後改築されたもの」とあり、明治後半以降に再建されたものであることが判明します。資料館日より第八号で明治四〇年頃に撮影された赤塚山から海の方角を移した眺望写真を紹介しましたが、そこに小さく野望堂が写っていることを指摘しています。そこに見えたのは、白壁に焼き板を貼った瓦屋



図5 阿弥陀堂部分(図2絵図拡大)

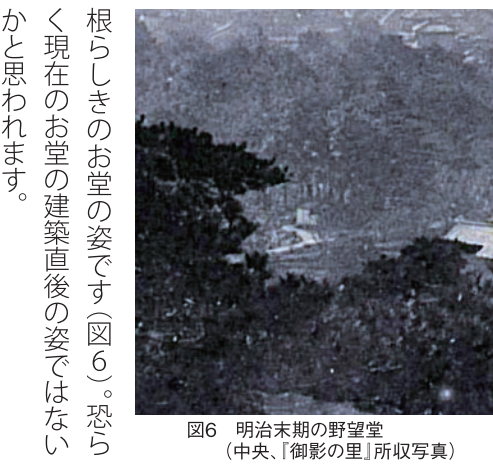


図6 明治末期の野望堂(中央、「御影の里」所収写真)

根らしきのお堂の姿です(図6)。恐らく現在のお堂の建築直後の姿ではないかと思われます。仮に明治四〇年(一九〇七)の再建としても、一〇〇年以上経過していることとなります。災害を多く経験した住吉には、古い建物がほとんど残っていませんが、ひよっとするとこの野望堂は、現在住吉に残された最も古い建物の一つかもしれません。さすがにあちこちが痛み今にも倒れそうなたたずまいで、消防から撤去すべきとの勧告もあるようですが、古い物がすっかりなくなってしまう現在の住吉にとって、地域の遺産ともいえるべきこの小さなお堂を、全くこのままとはいわれないまでも、直すべきところは直すとして、お堂の基本部分はなんとか残せないものでしょうか? 関係者の皆様のご理解に期待します。

# 東求女塚古墳と菟原処女伝承(4)

近大姫路大学人文学・人権教育研究所准教授 住吉 歴史資料館 専門委員 松下正和

## 東求女塚古墳からの出土物

東求女塚古墳では過去数度にわたる古墳の土取りの際に、三角縁神獸鏡四面、内行花文鏡二面、画文帯神獸鏡一面、鏡式不明の鏡三片の青銅鏡と、車輪石・勾玉などが出土しています。今回は、これらの出土品のうち、主に鏡を中心に紹介したいと思います。

大正一四年(一九二五)の兵庫県による報告書『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第二輯』(梅原末治氏執筆)では、明治の初年に発掘がなされ、その後明治三六、七年頃に阪神電車の線路敷設のため古墳の土取をした際に遺物の発見があったとされています。この経緯については前回述べたとおりです。『住吉村誌』によると、出土した遺物を「村役場」に保管していたところ、明治四五年(一九二二)に東京帝室博物館(現在の東京国立博物館)より学術研究所の資料として寄贈の要望があったため、県警察部を経由して送付したとあります。寄贈した年代は櫃本誠一著『兵庫県の出土古鏡』によると大正二年(一九一三)のこととされており、三面の鏡が寄贈されました(下記の鏡①～③を参照)。その他に、役場では三面の鏡(下記の鏡④

⑤を参照)などが保管されていたようですが、現在では行方不明となつていくそうです。これら①～⑥の鏡は古墳の後円部から出土したものです。昭和五七年(一九八二)には、遊喜幼稚園の園舎改築工事に伴う発掘調査が神戸市教育委員会によって行われ、当古墳出土の古鏡の破片が地元で保管されていることが明らかとなりました。それらの鏡は、明治三三年(一九〇〇)に福原潜次郎氏の指導のもと、地元の前上福之助氏らによって発掘されたものと伝えられています。遺物は「小型の銅鏡二面と木片、矢尻」が発見されたが、鏡は人夫の不手際で粉砕されたとのこと。四つの破片(下記の⑦～⑩を参照)が残されています。福之助氏のご長男吉胤氏の著書『灘の四季』(わた吉、一九八四年)に、破片の写真が掲載されています。なお、これら⑦～⑩の鏡は古墳の前方部から出土したものです。

⑦から⑩の鏡のように、『住吉村誌』刊行以降新たに「発見」された破片もありますので、東求女塚古墳から出土した鏡について改めて紹介してみましよう。なお、『住吉村誌』の記載は、先にも挙げた大正一四年の兵庫県による報告

書の内容をそのまま転載しています。記述も専門的になっていきますので、もう少し平易に解説してみたいと思います。鏡の名称や解説については、櫃本誠一氏『兵庫県の出土古鏡』(学生社、二〇〇二年)、『西求女塚古墳と青銅鏡』(神戸市教育委員会、二〇〇五年)などを参照し、最新の知見に基づき変更いたしました。

## 卑弥呼の鏡か!? — 東京国立博物館所蔵鏡

『住吉村誌』に東京帝室博物館に寄贈したとあるのが、以下の①～③の鏡です。これら三枚の青銅鏡はいずれも三角縁神獸鏡です。三角縁神獸鏡は、縁の断面が三角形をなしている古墳時代前期の古墳から出土するという特徴があります。いわゆる『魏志倭人伝』の中で、魏の皇帝から邪馬台国の女王卑弥呼が賜ったという「銅鏡百枚」に、この三角縁神獸鏡をあてる研究者も多いので、皆さんにも馴染み深い鏡ではないかと思えます。

①三角縁天王日月唐草文帯四神四獸鏡 『住吉村誌』では、「(四)三角縁華紋帯四神四獸鏡」と紹介されているものです。直径は約二・二センチ、ほぼ完形鏡です。

内区の構図は四柱の神像と四体の獸像が表現されていることから「四神四獸鏡」といいます。二対の神像及び二対の獸像が各二組交互に配置されています。神像背後の羽翼がしっかりと描かれ、獸像は「銜巨」(大きな綱をくわえている)の形式で獸像の間に笠松形の文様があります。銘帯には六個の方格で等分され、その間に円座乳を置いて二区画に分け、S字形の唐草文が配されています(ただし一箇所は星座状小乳)。方格は四分分され「天・王・日・月」の四文字が書かれています(図一)。図像の铸上がりは不鮮明で、梅原末治氏は仿製鏡(日本で模倣製作された鏡)と想定しています。同範鏡(同じ鑄型で作った鏡)として京都府寺戸大塚出土鏡があります。

②三角縁天王日月獸文帯二神三獸虫鏡 『住吉村誌』では、「(五)三角縁獸帯神獸鏡」と紹介されているものです。直径は約二・二センチ、ほぼ完形ですが、現在は亀裂を生じ鏡面にゆがみがあります。全体の铸上がりも悪く半分は曖昧模糊としています。内区は六個の撰文座乳で六区画に分け、その区画内に神像と獸像の各三体を交互に配置している三神三獸鏡の文様を基にして、一体の神像



